川崎市青少年科学館紀要（16）；77－79（2005）

“ホルストの「惑星」とその時代”投影報告

井澤武二*・早川尚夫*

The report of the planetarium program “The Planet by Holst and this times”

Takeji Izawa*・Hisao Hayakawa*

1　プラネタリウム宇宙教室紹介

はじめに、我々が所属する川崎市青少年科学館「プラネタリウム宇宙教室」を紹介します。

2002年春に、川崎市多摩区が主催した天文学短期講座の出席者が主体となり発足した同好会が母体です。１年後、市青少年科学館が公募する「プラネタリウム宇宙教室」という看板で再発足し現在に至っております。総勢29名の集団です。

再発足時、科学館より、望遠鏡を覗くばかりでなく「プラネタリウム番組を作ってみたら」というお誘いがありました。

この提案に対して、取りあえず三つのアイデアが採択されました。第１作「三蔵法師が見た星空」は、2003年11月に発表されました。第３作「万葉集で愉しむ星空」も目下着々と準備中です。

2　第２作「ホルスト番組」制作の特徴

この第２作制作にあたっての目玉は、第１作とは異なり以下の点があげられます：

(1) プラネタリウム投影機の自主操作
(2) 音楽の選定・演奏の自主操作
(3) 液晶プロジェクター画面自主制作・投影

第１作発表では、シナリオ制作・ナレーション及びタイトル画面とプログラム・パンフレット等は自作でしたが、所謂「コンソール内操作」は科学館の亀岡さんに委ねる形態でした。第２作では、我々は「コンソール内担当」も会員の手で実施することを希望し認めていただいたのです。実質討議開始は、2004年の春からです。

５月のある日、読売新聞の取材も受けました。記事に添えられた練習風景写真には、会員のコンソール内外での作業風景があります。先ず、３名のプラネタリウム操作担当が各自のジョブをこなしています。その隣では音楽担当が２台のＣＤプレーヤーを鮮やかに操作しています。

コンソール内に入りきれない液晶プロジェクター及びパソコン操作担当が２名小さいデスクに張り付いて操作している姿も見えます。その隣には、ナレーション担当が２名、明かり漏れ防止用フードの下でシナリオを順次読んで行く姿もみられます。

ホルストの組曲とともに解説、機械操作も

市民ら自主制作 “星空劇”第2弾

19日、市青少年科学館プラネタリウムで

（読売新聞の紹介記事）

ホルストの組曲「惑星」を星空の下で聴いてもらいたい…という名曲鑑賞の部分とプラネタリウム投影を眺めながら天体の知識を得てもらいたい…という部分との双方を観客の皆さんに満足してもらうために、音楽解説・鑑賞のパートと惑星の天体解説とトピックスのパートを液晶プロジェクターで投影しながら番組を進めてゆく構成を採りました。

シナリオ作成の段階で、この二つのパートをどのくらいの比率で盛り込むかで意見がなかなか集約できず苦労したことも今はなつかしい思い出です。

「ホルスト番組」制作の最大の目玉の一つであったプラネタリウム自主操作は、2004年の２月より熱のこもった指導が始まり、

①当日の日没より20時頃までの夜空投影、
②金星の日面通過現象解説に必要な太陽を中心とする惑星の動きの投影、
③水星のめまぐるしい位置変化の操作、
④フィナーレの日の出操作等々

約４ヶ月に亘る訓練で、その技量は次第に向上して行きました。

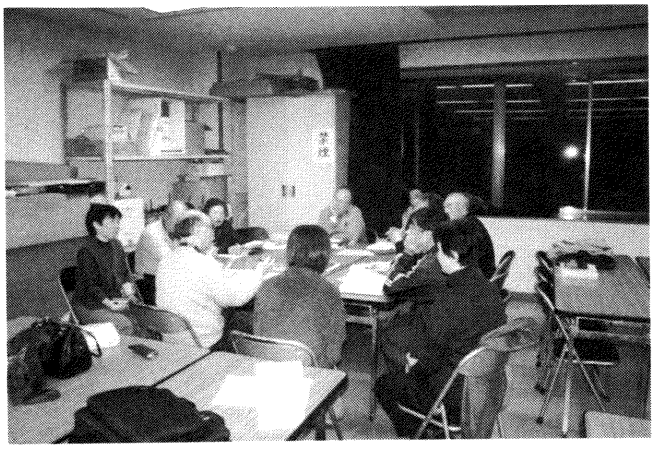
3　トータル・パフォーマンス「全員参画」の旗印の下で制作に取り組む

ただ思いつきでホルストをテーマに何か制作してみたい……という極めて曖昧な動機でスタートした素人集団

＊ プラネタリウム宇宙教室

です。加えて、我々の組織自体のスタートからも日が浅く、お互いの気心も十二分に熟知している間柄ではありません。とにかく、会員全員参画の精神で開始することで皆さんの同意をとりつけたのが2003年の暮れでした。いくら「全員参加」の建前論を月例会の度に連呼しても最初の反応は「微か」でした。

そのうちに提案者の重なるヘマを見かねて手を貸してくれるようになり、協力のパワーは次第に大きくなって行きました。特筆すべきは、お互いの垣根が取り外される過程で判ったことは、一人ひとりの方が専門知識と趣味の知識共に、途方もない間口と奥行きの持ち主であることでした。



（制作の打ち合わせ）

そして以下のような担当グループを設置しました。

（1）太陽系惑星解説資料および画像作成担当
（2）音楽編集および組曲「惑星」解説作成担当
（3）プラネタリウムの歴史担当
（4）天文学歴史と西洋占星術担当
（5）プラネタリウム操作要員（3名）
（6）ホルスト生誕地周辺資料収集
（7）ナレーター（2名）
（8）進行表（シナリオ含む）作成担当
（9）当日配布用パンフレット作成
（10）アンケート用紙作成担当
（11）広報担当（ポスターおよび案内ハガキ作成）
（12）当日会場整理担当

全員がいずれかの役割を分担し、各担当ＪＯＢで企画したことを全体にフィードバックして検討・練習等で実地検証して番組作りに反映させてゆく方法が次第に確立されて行きました。投影予定日の約一ヶ月前に実施した八ヶ岳合宿で「垣根」もすっかり取り払われ、深夜までかけて喧々諤々行ったリハーサルもなつかしい思い出となりました。

4．ホルスト「惑星」とプラネタリウムの発祥

番組作成の始まりは、ただ思いつきでタイトルを考えただけ、構想もテーマも決まらないままのスタートでした。ところが、ホルストの人物像を調べてゆくうちに「占星術」に一時関心を持ったり、また後年「脱西洋的思想」に傾倒してゆく人生を知るにつれ、ホルストに対するスタンスも次第に変わってゆきました。

更に、ホルストの時代を知るために20世紀初頭の歴史を調べてゆく過程で、第1次世界大戦が「レンズの戦争」と呼ばれていた事実を知ります。戦争を怖れ平和を願う心情を込めたホルストの曲作りも当時の「大戦」あってのこと。一方、「大戦」が科学技術の進歩を促し、あの「プラネタリウムの華々しい登場」も戦争の副産物といっても過言ではない時代背景を学びました。

当時の光学技術の進歩が、その後の宇宙の謎の解明に大きく寄与して行った歴史的事実を学んだのも我々にとって大きな収穫でした。

ホルストの組曲「惑星」完成とプラネタリウム誕生の二つの事象を結ぶキーワードは、「第1次世界大戦」。我々の作品のテーマはここで決まりました。

5．リハーサルから投影当日まで

5月に入り、今まで月1～2回の練習も、週1～2回の練習になり、その度に進行表（シナリオ）に対する改訂要求が積極的に出るようになって来ました。会員間の「垣根」は無くなりました。皆それぞれ仕事あるいは他のお稽古ごと等を持つ忙しい方々の集まりで、全員出席は困難なリハーサルでした。問題は、プラネタリウム操作・音楽演奏・ＰＣ使用の画像投影・二人のナレーション等の各担当部門の受け渡しを如何にスムースに行えるか…の一点に絞られました。この課題を充分に解決しないまま投影当日を迎えてしまいます。

投影当日、心配された天気も問題なさそうです。会場案内担当の方から、続々とお客様が集まってくるという連絡に緊張感が走ります。席数236のホールに190名の観客が入りました（整理券発行により確認）。残る客席は科学館関係者と会員で占められました。各担当部門のパートの受け渡しを如何にスムースに行うか。この点を皆で確認して投影が始まりました。

投影時間は「48分」でした。目標の50分を下回るタイムです。結果は大成功でした。各パートの受け渡しも我々

（満員の来場者）

の予想を上回る絶妙のタイミングで運ばれました。あの最終リハーサル終了時の不安感は一体どこに行ってしまったのでしょう。

勿論、反省会の場で出たように、反省すべき点はあったことは否めません。大事なポイントは、会員全体の手による「トータル・パフォーマンス」が完遂できたことです。第1作「三蔵法師の見た星空」投影の体験が第2作で充分活かすことができました。

6．アンケート結果

入場者には番組用解説パンフレットを配るとともに「アンケート用紙」も配布、記入をお願いしました。アンケートの回収数は「110」枚。来場者数の58%でした。

(1) 年齢別入館者

特筆すべきは、で、30／40才代が36%を占めたことです。広く各世代にアピールした企画でした。

(2) 来場動機

「知人からの案内」が40%とトップでしたが、同時に「科学館広報」と「新聞・ミニコミ紙記事」が伝達ツールとして有効であることを再確認しました。

(3) 総合評価

「知人からの案内」以外で来られた方々から好意的な総合評価をいただけた。

(4) ホルスト音楽に対する感想」

「よい音楽」との感想が85%を占めたこと。投に使用した「エッセンス部分」の選択が極めて妥当であったと自画自賛しています。ＪＰＯＰでの「平原綾香」人気もあったでしょうか？　因みに我々のホルスト企画は平原綾香登場以前からの立案であったことをこの際申し添えておきます。

7．結びのことば

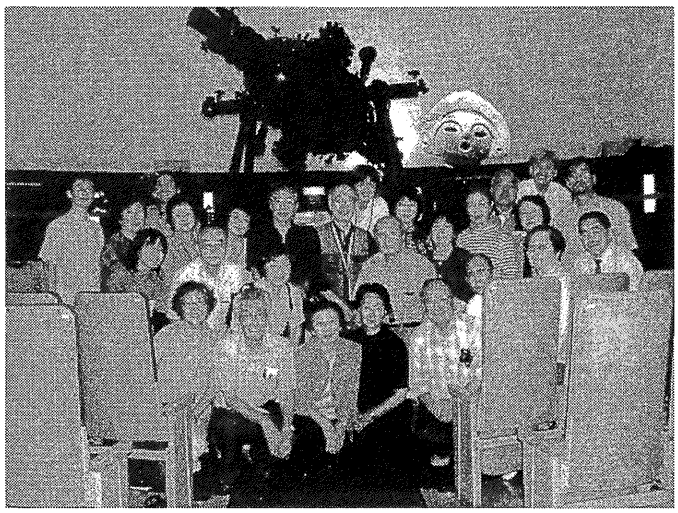
「夢というものは」とある劇作家が云っているそうです。「現実について少しだけ知っているが、十分には知らない人が持ち得る特権」だと。怖さも知らない素人集団が、夢にかける挑戦と思い込んで暴挙に近い行動をした顛末の一部を報告とさせていただきました。

数日前も夏休み中の孫たちを連れて川崎市青少年科学館のプラネタリウムに行ってきました。プラネタリウム・ホールの椅子に坐りプラネタリウム投影機とその隣にある「メガスター」を見ていると、ホルストの名曲が、あの投影以来ドームの中に棲みついてくれたような気がします。

この途方もない「夢」を見る機会を与えてくれた川崎市青少年科学館の皆さん、特に素人の我々に番組作りの場を大胆にも認めてくれた前館長の若宮氏と番組制作の過程で終始暖かく見つめてくれた二人の指導者に感謝の念を述べたいと思います。

制作の過程で、もうこんな事は二度とするまいとか早く済ませてのんびりしたいと何度も思った私です。

最近、家族を前にして、プラネタリウム番組の新しい材料を何点か考え、熱っぽく語っている自分に気が付くと「なんと懲りない奴め！」と恐ろしくなる今日この頃です。



投影終了後の記念写真